

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：32619

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02898

研究課題名(和文) 英語研究論文の第1人称代名詞の使用実態調査と英語論文の書き方指導への応用

研究課題名(英文) Investigation into the use of first-person pronouns in English research articles (RAs) and its application to the instruction of English RAs writing

研究代表者

川口 恵子 (Kawaguchi, Keiko)

芝浦工業大学・工学部・教授

研究者番号：80369371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：近年出版された2つの学際分野(応用言語学および情報システム学)の国際ジャーナル論文中の第1人称代名詞を、頻度、出現箇所、コミュニケーション上の役割の観点より調査をした。その結果、同一分野内の論文であっても、研究アプローチや著者の人数が異なると、第1人称代名詞の使い方が異なることが分かった。さらに、英語論文の書き方の指導書やマニュアルで第1人称代名詞の使い方に関し、どのような助言があるのかを調べ、先行研究結果から示された論文での使用実態と助言の内容を比較し、指導書の助言の内容が読者にどの程度有用であるかを評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語論文中で、著者のみ、あるいは、読者と著者両方を指す第1人称代名詞を適切に使うことは、論文執筆者が自分の研究の正当性や貢献を読者に伝えるだけでなく、読者との関係性を構築する上で有用なツールの一つだと言われている。これまで論文中の第1人称代名詞の研究では、学問分野の差異という視点でしか主に研究されて来なかったが、本研究は、同じ学問分野内であっても、研究手法や著者の人数が変われば、第1人称代名詞の使い方が変わるということを示した。本研究の結果は、教育の現場でより丁寧に、効果的に第1人称の使い方を指導する上で重要な知見を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：The use of first-person pronouns in international journal research articles in two interdisciplinary fields (applied linguistics and information systems) was investigated in terms of frequency, location in the article, and discourse roles. The results suggest that the type of research approach adopted and the number of author(s) (single or multiple authors) influence the use of first-person pronouns within a discipline. Furthermore, advice on the use of first-person pronouns in research articles in guidebooks for research/academic writing and style manuals was collected and analyzed to evaluate how the advice is useful for the readers to what extent.

研究分野：英語教育

キーワード：第1人称代名詞 研究論文 頻度 ディスコース機能 研究アプローチ コーパス 応用言語学 情報システム学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

国際競争力強化のため、研究成果を英語で発信できる英語力の涵養が日本の大学で急務となり、英語教育を担う教員には、英語の研究論文やアカデミック・ライティングの書き方の指導を担うことが求められている。そこで、英語の教員は自分の専攻とは異なる専攻の学生に対してライティングの指導をすることとなるが、指導の際には、様々な分野で慣習的に実践されている英語論文の特徴を知っている必要がある。このような特徴の一つに、論文中で使用する第 1 人称代名詞 (I, we 等) がある。

研究論文中の第 1 人称代名詞の研究は、ESP (English for specific purposes) の分野では、1990 年代より Hyland (2001) や Kuo (1999) らを代表とする多くの研究者により行われてきた。その結果、1) 客観的に研究結果を記述する研究論文は非人称的だとそれまで考えられてきたが、理系の論文でも第 1 人称代名詞が使用され「著者のアイデンティティー」が示されていること、2) 第 1 人称代名詞の使用頻度は学問分野により異なること、3) 著者が母語話者がそうでないか、等の属性と著者の属する文化により第 1 人称代名詞の使い方が異なること等が示された。

近年の研究においては、第 1 人称代名詞の使用が時代とともに変化し、また、同一分野内であっても、採用する研究アプローチにより第 1 人称代名詞の使用に差異がある可能性が指摘された (Hu & Cao, 2015; Hyland & Jiang, 2017)。そこで、これまでにあまり研究されていない「研究手法の差異」や「著者の人数」の観点より近年の論文中で第 1 人称代名詞の使用実態を明らかにすることにより、その知見を教育現場に活かすため、本研究に着手することにした。

2. 研究の目的

第 1 段階の研究の目的は、近年出版された学際的分野内の研究論文で、研究アプローチや、著者の人数 (共著・単著) が異なる場合、第 1 人称代名詞の使用にどのように影響を与えているのかを明らかにすることである。そして、第 2 段階の研究として、第 1 段階の研究で得られた結果、すなわち、近年の論文で実践されている第 1 人称代名詞の使用の特徴が、どの程度、英語論文の書き方の指導書や style manual の記述や助言に反映されているのかを調査することを目的とした。第 1 人称代名詞には、著者のみを指す exclusive な I, my, me, we, our, us と、著者と著者以外の者を指す inclusive な we, our, us がある。本研究ではどちらも分析の対象とした。

3. 研究の方法

(1) 論文中の第 1 人称代名詞の研究 - 研究アプローチと著者の人数の観点より

2 つの学際分野 (応用言語学と情報システム学) のインパクトファクターの高い国際学術誌論文を対象に、研究アプローチと著者の差異が第 1 人称代名詞の使用にどのように影響を与えているのかを調べるため、それぞれの分野で 2 種類の学術誌より、研究開始時点での最新号よりさかのぼり、研究アプローチの異なる論文を等しい本数選び、コーパスを構築した。

応用言語学で比較をしたのは、質的アプローチと量的アプローチの論文である。また、情報システム学で比較をしたのは、コンピュータサイエンス分野の工学的研究手法をとるデザイン科学研究アプローチと社会学・心理学分野の手法に基づく行動科学研究アプローチの論文である。情報システム学の論文は単著が殆どなく、ほぼ全て共著論文である。一方、応用言語学の場合は、単著・共著論文ともにあるので、それぞれを等しい数の論文を分析した。

論文コーパス作成の際には、タイトル、著者名、所属、文献、図表、および引用中の第 1 人称代名詞を全て削除し、本文のみを分析に使用した。コンコードダンスソフトを用い、第 1 人称代名詞 I, my, me, we, our, us を抽出し、we, our, us は文脈にあたり、書き手のみを指す exclusive な用法であるか、著者和其他の者を含めた inclusive な用法なのかを確認し、分類した。その後、頻度、出現箇所 (どのセクションで使用されているか)、ディスコース機能 (どのようなコミュニケーション上の目的で使用されているか)、主格 I, we の共起動詞を調べ、異なる研究アプローチの論文中の第 1 人称代名詞の特徴を明らかにした。

(2) 研究論文のマクロ構造の分析研究

上記の研究を行う上で必要となった研究が異なる研究アプローチの論文構成 (マクロ構造) の分析である。2 つの異なるアプローチの代名詞の出現箇所を比較するためには、それぞれの研究アプローチ論文でどのセクションとどのセクションが対応しているかを調べる必要がある。そこで、対象論文全てのセクションのディスコース上の目的 (研究の背景を説明する、関連研究のレビューや概念の説明を行うなど) を確認し、セクションの類型化を行った。

(3) 論文の書き方の指導書・style manual 中の第 1 人称代名詞の記述に関する調査

アカデミック・ライティングや論文を書く際に学生が参考にしたり、教員が指導する際に参照する以下の 2 種類の出版物、および、英語圏 2 カ国 (英国・米国) の大学付属のライティングセンターのウェブサイトにあたり、第 1 人称代名詞の使用についての記述の有無を確認し、記述を

収集した。その後、先行の調査研究で得られた実際の論文での使用実態の調査結果を参考に、第1人称代名詞の記述やの内容が、近年出版された論文での実態をどの程度反映しているかを調べ、読者にとっての有用度に応じ分類、評価した。

- 1) 論文の書き方の指導書・style manual (2冊を除いて全て2000年以降に出版)
- 2) 主要な学術専門分野で推奨されている style manual の最新版
- 3) 英米国の著名な国公立私立大学、リベラルカレッジ付属のライティングセンターのウェブサイト

4. 研究成果

(1) 応用言語学分野の *Journal of Second Language Writing* と *English for Specific Purposes* の2誌で、2013年～2017年に出版された論文計56本(質的研究論文28本、量的研究論文28本、それぞれ単著、共著論文14本ずつを含む)の分析より主に以下が示された。

- 1) 単著論文の場合、質的論文の方が量的論文より第1人称代名詞(exclusive)の頻度が有意に高く、研究アプローチによる差異が見られた。
- 2) 共著論文の場合、質的アプローチの論文の第1人称代名詞(exclusive)の頻度は量的論文より高い傾向にあるものの、有意な頻度差は見られなかった。
- 3) Inclusiveな用法のwe, our, usの頻度は、研究アプローチ間でも、単著論文、共著論文間でも差が見られなかった。
- 4) 受動態の使用が一般的に推奨されるMethodsセクションでは第1人称代名詞はあまり使われていないであろう、と予測していたが、実際には第1人称代名詞が多用される傾向が確認され、特に、量的研究の単著論文ではMethodsセクションにIの使用が集中していた。
- 5) ディスコース機能の分析より、第1人称代名詞は、質的論文と量的論文では使い方が異なることがわかった。質的論文の方が様々な文脈で第1人称代名詞が使用されていた。

(2) 情報システム学分野の *Decision Support Systems* と *International Journal of Information Management* の2誌で2017年～2018年の間に出版された論文計40本(デザイン科学研究(DSR)パラダイム、行動科学研究(BSR)パラダイムの論文各20本-全て共著)の分析より主に以下が示された。

- 1) 第1人称代名詞の頻度は研究パラダイムによって頻度が有意に異なり、BSRの論文でexclusiveな第1人称代名詞の使用頻度が高かったが、DSR論文では、inclusiveな第1人称代名詞の使用頻度が有意に高かった。
- 2) 共起動詞の分析より、それぞれのタイプの論文では、代名詞が使われる文脈に差異があり、その特徴が動詞の時制に表れていることがわかった。

(3) 上記の論文中の代名詞の研究結果より、次のような教育的示唆を得ることができた。

- 1) 英語の論文の書き方を指導する際には、第1人称代名詞の使用は、学問分野間の差異だけでなく、同一分野内であっても、採用する研究アプローチにより異なる傾向があり、個々の研究アプローチの性質の違いにも触れた上で、第1人称代名詞の適切な使用についての指導が必要である。
- 2) 研究アプローチの差異は論文のマクロ構造に表れ、研究論文の構成が必ずしもIntroduction, Methods, Results, Discussionでないことを指摘し、学生には、各自の分野の自分が採用する研究アプローチの論文のマクロ構造を参照させ、セクション構成が学問の性質とどのように関連しているかを意識させるとともに、各セクションで使用される第1人称代名詞のディスコース機能を意識させることが第1人称代名詞の適切な使い方への気づきに通じる。

(4) 論文の書き方の指導書・style manual(約40冊) 英米の主要大学付属のライティングセンターのウェブサイト(約50)の調査の結果、指導書やマニュアルでは約半数程度、ライティングセンターのウェブサイトでは三分の一程度でしか第1人称代名詞についての記載がなく、その多くは、頻度やどのようなセクションでどのように使うのか、といった具体的な記述がなく、調査で得られたような近年の論文での使用実態を十分に反映させたものではなかった。また、学術分野によっても助言の濃淡のばらつきがみられ、十分な記述になっていないことが分かった。

<引用文献>

Hu, G., & Cao, F. (2015). Disciplinary and paradigmatic influences on interactional metadiscourse in research articles. *English for Specific Purposes*, 39, 12-25.

Hyland, K. (2001). Humble servants of the discipline? Self-mention in research articles. *English for Specific Purposes*, 20, 207-226.

Hyland, K., & Jiang, F. (2017). Is academic writing becoming more informal? *English for Specific Purposes*, 45, 40-51.

Kuo, C.H. (1999). The use of personal pronouns: Role relationships in scientific journal articles. *English for Specific Purposes*, 18, 121-138.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川口恵子	4. 巻 436
2. 論文標題 学際分野における異なる研究パラダイムをとる研究論文分析 第1人称代名詞と共起動詞の観点より	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 工学分野における学術テキストの分析手法 統計数理研究所共同研究レポート	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川口恵子	4. 巻 425
2. 論文標題 情報システム学（Information Systems）学術論文の macro-structureについて 異なる研究パラダイムの観点より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究レポート	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川口恵子、伊東田恵	4. 巻 404
2. 論文標題 工学系学術論文における第1人称代名詞の使用 分野差の視点より -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同リポート	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kawaguchi, K., Ota, H, Ohta, R & Ito, T	4. 巻 35
2. 論文標題 Use of First-person Pronouns and their Discourse Functions in Quantitative and Qualitative Research Articles in Applied Linguistics	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 KATE Journal	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 石川有香、伊東田恵、川口恵子、竹井智子
2. 発表標題 工学系大学の英語教育 何を教えるべきか、何を教えてほしいのか
3. 学会等名 The 58th JACET International Convention (Nagoya, 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko Kawaguchi, Harumi Ota, Ritsuko Ohta and Tae Ito
2. 発表標題 Connecting practices of first-person pronoun usage in recent research articles to existing writing guidelines for researchers
3. 学会等名 18th Annual Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawaguchi, K., Ota, H, Ohta, R & Ito, T
2. 発表標題 Influences of Research Paradigmatic Differences on the Use of First-Person Pronouns in Research Articles in the Field of Information Systems
3. 学会等名 17th Annual Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Keiko Kawaguchi, Tae Ito, Harumi Ota & Ritsuko Ohta
2. 発表標題 Influences of research approaches on interactional metadiscourse in applied linguistic research articles
3. 学会等名 53rd RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年～2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「科学研究補助金（基盤研究(C)）調査研究成果資料集：英語研究論文の第1人称代名詞の使用実態調査と英語論文書き方指導への応用」（全71ページ）として教育現場で役立つ事例等を小冊子にまとめた。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	太田 晴美 (Ota Harumi) (00366527)	日本大学・法学部・教授 (32665)	
研究分担者	伊東 田恵 (Ito Tae) (40319372)	豊田工業大学・工学部・特任准教授 (33924)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------